

「今、私の晴雨計は！(59)」

### 「私の愛唱歌と三人の歌手」

平山征夫

愛唱歌はその人の生きた時代で全く異なると以前書いたが、それを如実に表すことが起きた。先日、大学でボールペンのインクが切れたので、若い女子職員にボールペンを差し出して「貴方かわりはないですか・・・」と歌ったが、きよんととしていた。他の職員は全員笑ったが、もう一人やはり20代の男性職員と彼女の二人はまったく「北の宿から」を知らなかった。

まさしの三人だ。それぞれと少しずつ交流があると同時にその持ち歌に沢山の私の愛唱歌がある。一九六七年大学を卒業、日銀に入り秋田支店に五月の連休明けに赴任した時、ラジオで耳にしたのが菅原さんの「知りたくないの」に続くヒット曲「今日でお別れ」だった。続く「芽生えてそして」「行かないで」「誰もいない」も好きになった。何より歌唱力があって歌に説得力があったし、自分にあった歌い方だと思っただからだ。すぐレコードを買った。そこにも「お別れね」「その手を放して」など気に入った曲がいくつもあった。三年後大阪支店に転勤した頃、二枚目のレコードが出たが、アルフレッド・ハウゼとの共演の

タンゴを集めたものだった。「夜のタンゴ」「夢のタンゴ」「バラのタンゴ」「カミニート」「黒き瞳」「小さな喫茶店」「さらば草原」「奥様お手をどうぞ」「許されぬ恋」などタンゴの名曲がずらり、それを菅原さんが日本語の歌詞で歌っているから堪らない。レコードと一緒に歌った。「潮風の中で」「はこの収録に際してハウゼが新しく作曲したもの。一番好きになったのが「永遠に別れを(アシエンプレアモーレ)」だった。時はカラオケ時代、私が古町のスナック等で菅原さんのヒット曲「芽生えてそして」をよく歌っていることが、新潟のファンクラブの代表のようなTさんに伝わり、知事時代新潟での公演後のファ

ンと菅原さんの会食に呼んでくれた。それ以来、新潟に来るたびに一緒にさせて貰った。現在、菅原さんは86歳だが、元気で現役の歌手としてすでに本年中の日程が詰まっている。そんな菅原さんが80歳の少し前に来た時のコンサートで正直「ああ、声が出なくなつたなあ」と感じた。かつての美声はもう聞けないのかと思っていたら、それから数年後のコンサートでは見事に復活された。発声法を変えられたのだろう、のびやかな美声が戻っていた。それから暫くして、十日町で菅原さんのミニコンサートがあつて出かけた。コンサートは素晴らしかった。公演終了後挨拶して別れたら、しばらくしてTさんが呼びにき

た。小さい部屋で伴奏のメンバーとビールを飲んでいた。しばし歓談した後、声が復活したわけをズバリ聞いてみた。「色々発声法を工夫してみても、結論としては吸った息をあまり声を張らず出来るだけ楽に出せばよいと分かった」という。隣で我妻が「主人は歳と共に息が続かないんですよ」とぼらす。そこで伸ばしの多い啄木の詩に曲をつけた「初恋」を練習曲としてレッスンをして貰うことになった。「はっこーいーの　　い

子第一号ですね」と称号まで下さった。第一号弟子としてずっと菅原さんの歌を愛唱してゆきたいと思っている。菅原さんは80才の時「ビューティフルメモリー」我が心の歌―80才の私からあなたへ」というCDを出されて以来、毎年企画CDを出され、昨年は「歌い続けて60年―85歳の私からあなたへ」を出されレコード大賞企画賞を受賞された。82歳の時には「我が心に残る歌」というタイトルで「初恋」や「花言葉の唄」「新雪」「忘れないわ」などジャンル、時代を問わず良い歌を集めたCDを、84歳の時には「大人のための子守歌」と題して童謡等を集めたCDを出された。菅原さんによって古い歌が甦っている。本

年はどんな企画で「86歳の私からあなたへ」の歌声を聞かせてくれるのか楽しみにしている。いつまでもこの企画が続くこと、再度レッスンを受ける機会を楽しみにしている。

小椋佳さんとは、本名の神田紘爾で第一勧業銀行の証券部次長をしていた(私は日銀の営業局調査役)頃からだから古い。もう既にシンガーソングライターとしてかなり売っていたので、彼が営業局に仕事で来ると日銀の女子職員は少しざわついたりした。銀行の役員同士で飲むこともあったが、次長の彼も私も末席、それがともすると歌手小椋佳の話題になることがあったが、そんな時は彼はやっぱり「仕事でするので

…」と言って話題をそらしていた。私は「シクラメンのかおり」「しおさいの歌」「六月の雨」などの彼の歌をよく銀行の会などで歌っていた。そのせいか付いたあだ名が「日銀の小椋佳」だった。悪い気はしなかった。顔が似ているから付いたわけではないと思うと思っていたが、後日そうでもないことを知らされた。知事時代、上越市のコンサートで冒頭「先日、私にTVドラマ出演の話が来たが、聴いてみると松本清張役だったので断った」という。会場からは「似ている」の声。ところが次に彼が言ったのは「代わりに平山知事さんを推薦すれば良かった…」だった。

その頃、毎年コメリがスポンサー

で「歌語り」という和と洋など異種類の音楽を組み合わせた舞台づくりにチャレンジしていた。新潟では舞台後打ち上げを兼ねて飲んだ。そうこうしているうちに胃がんの手術となった。術後は大分痩せて食事でも六回に分け、それもご飯を日本酒で流し込むという食べ方だった。「新潟の銘酒でご飯を流し込むとは贅沢な」と私は嗤っていたが、一日も早い全快を内心願っていた。

銀行を退職して二足のわらじを脱いで以降、彼は「もう一度学び直す」と言って卒業大学に学士入学したが、一年で卒業すると「やはり、学ぶなら哲学だ!」と言って受験勉強をして東大の文学部哲学科に入学した。知事を退任

した私に「俺と同じように旅回りの歌手になったら!」と冷やかしていたが、大学教授になったと言ったら「そうだ昔からある、振る舞う」という言葉が教育上大事だと哲学の恩師に教わったよ。日本舞踊を習う時など初めは師匠の振りを見たり、振付けて貰ったりするけれど、最後は自分にしかない踊りを舞うようにならないればいけない。振りから舞うへ、その人にしかない才能を引き出して自立できるようにするのが教育だよ」とアドバイスしてくれた。学長の間ずっとこの言葉を大事にしてきた。

小椋さんは日本語の繊細さを大事にする人で、季節や心の移ろいを敏感に感じ取った素晴らしい

詞を沢山歌にした。六月の雨の「見えない何かを信じながらいくつ春を数えても いくつつ秋を数えても 二人でいたい」や

「忍ぶ草」の「貴方のことを信じていても 惑いひとつに泣きそうになる せめて優しい音を釣り忍」、*「心の襷」*の「心の中に重なりあった想いでのかからどれも皆な貴方とのこと」などは私の好きな歌詞だが、小椋さんの詞に井上陽水が作曲した「白い一日」の詞は素晴らしい。詩人の詩だ。*「愛燦々」*ははじめ多くの歌手から曲を依頼されるのも作詞能力が高いせいだろう。

小椋さんの初期のヒット曲の「しおさいの歌」はまるで最近作詞したようだ。「思い切り呼んで

みたい 果しない海へ 消えた僕の若い力 呼んでみたい」。その小椋さんが二〇一四年秋、「生前コンサート」を開き四日間での〇〇曲歌うイベントに挑戦した。歌手の生前葬にあたるこのコンサートに参列出来なかった。その直後は「葬儀を出した歌手のところにコンサート依頼が来るのでどうしようか迷っている」と言っていたが、今もあごひげが白くなったが元気でコンサート活動を行っている。それを見て、半年後輩の私としては負けないようにという想いと共に更なる我が愛唱歌を期待している。

さだまさしさんとは、二〇二〇年ワールドカップ新潟大会の会場「ビッグスワン」のこけら落と

して、県民参加のミュージカル「木を植えた男」の作詩・作曲と主演をお願いして以来だ。この企画は、県民運動として一〇〇年間木を植える運動を発案した私をサポートしてくれた作家の新井満さんの提案だ。色々選考した結果満さんが「さださんしかいないよ」と言うのでお願いすることにした。さださんと大の仲良しの画家原田泰治さんとも一緒に付き合うことになったが、ともかく楽しい。落語家志望だったせいか駄洒落大好き、私の駄洒落を「舞台上で使うので頂きます」と言っただ。県民運動のテーマソング「木を植えた男」の曲を創って貰うのに「さださん、良い歌お願いします。亭主関白より長くならないよ

うにしてくださいね」と言ったら「あれは亭主関白ではなく関白宣言です」と訂正された。出来てきた歌は素晴らしかった。「森は水をつくり 水は人を育て なのに人は水を汚しながら生きる」。長かったけれど、内容のある歌だった。亭主関白より数段気に入った。さださんにはもう一回訂正されたことが在る。私の大学の大学祭で恒例の有名人による講演は父母会の提供なのだが、ある年「さださんの希望が多いので交渉してみたい」との依頼が私に came。通常は専門の企画会社に任せるのだが、私に頼んだ方が脈があると思ったのだろう。早速マネージャーをしている弟さんに電話した。「平山さんが学長を

している大学の話ですので、すぐ繋ぎます」ということだったが、返事は「その日時は残念ながら空いていません」とのこと。かなり先まで日程が埋まっているから無理だろうと予想していたのだが、その後の返事には一本取られたと思った。「すいませんが兄が平山さんに念のため言うておいて欲しいとのことですが、さだまさしは歌手ですので、講演の依頼は原則受けていませんと・・・」。「なるほど、その通りだ！」と納得した。

何度か二人のコンサートで「これ、歌手のコンサートなの、お話を聞く会じゃないの」と思いながら「何時歌い出すのかなあ」と気をもんでいた。話ぶりやテーマなど全く違うが、二人とも語るのが好きだし、内容のある話をするので、三時間もあつという間だ。さださんはマルチ人間だ。シンガーソングライターとして沢山の素晴らしい歌の作詩・作曲をしているだけでなく、作家として「眉山」「風に立つライオン」などすぐれた創作をしているうえ、絵本作家でもある。ヴァイオリニストとしても落語家としてもほぼプロ並みというところがすごい。私がさださんが好きなのは、長崎出身、身内に被爆者がいるというこ

ともあるが強い平和への想いを  
持っていることだ。また会ったら  
ステージネタを提供すべくこち  
らも切磋琢磨しよう。

三人三様であるが、三人とも日  
本を代表する歌手だ。もつとも冒  
頭の二十歳代の二人は、やっとさ  
ださんの名を知っている位だ。  
「歌は世につれ世は歌につれ」な  
のだが、我々の時代を代表する三  
人の歌手と多少の交流が出来た  
ことは、私の人生の中でも宝石の  
ようなひと時だったと思う。

(令和元年5月31日)

